

令和元年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－8号)

農林総合研究センター
令和元年7月18日調査

気象経過

<平年対比>

【平均気温】

- ・7月第2半旬は、金沢、輪島ともに並（平年差：金沢 -0.1°C 、輪島 $+0.1^{\circ}\text{C}$ ）
- ・7月第3半旬は、金沢、輪島ともに低い（平年差：金沢 -1.5°C 、輪島 -0.9°C ）

【日照時間】

- ・7月第2半旬は、金沢は多く、輪島は並（平年比：金沢133%、輪島103%）
- ・7月第3半旬は、金沢、輪島ともにかなり少ない（平年比：金沢17%、輪島41%）

【降水量】

- ・7月第2半旬は、金沢、輪島ともにかなり多い（平年比：金沢0%、輪島0%）
- ・7月第3半旬は、金沢、輪島ともにかなり少ない（平年比：金沢36%、輪島43%）

【1ヶ月予報】

7月11日発表の1か月予報（7月13日～8月12日）では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

生育概況等

【本田の生育】

1. 出穂期予想

ゆめみづほは近年に比べ2～3日早く、加賀地域、能登地域のいずれも既に出穂期となっている。

能登ひかりは近年に比べ1日早いと見込まれる。

コシヒカリは、加賀地域は平年に比べ4日早く、能登地域は平年に比べ3日早いと見込まれる。

ひやくまん穀は、加賀地域で近年に比べ4～6日遅く、能登地域は近年に比べ3日早いと見込まれる。

ゆめみづほ	加賀：	7月15日～7月18日	近年より2～3日早い
	能登：	7月18日頃	近年より5日早い
能登ひかり	能登：	7月23日頃	近年より1日早い
コシヒカリ	加賀：	7月24日～7月31日	平年より4日早い
	能登：	7月30日～8月2日	平年より3日早い
ひやくまん穀	加賀：	8月3日～8月10日	近年より4～6日遅い
	能登：	8月7日頃	近年より3日早い

2. 草丈

ゆめみづほは近年比103%（加賀地域102%、能登地域104%）と並。

コシヒカリは平年比100%（加賀地域98%、能登地域102%）と並。

ひやくまん穀は近年比95%（加賀地域97%、能登地域94%）とやや短い。

3. m²当たり茎数

ゆめみづほは近年比110%（加賀地域115%、能登地域100%）とやや多い。

コシヒカリは平年比106%（加賀地域107%、能登地域103%）と並。

ひやくまん穀は近年比112%（加賀地域119%、能登地域105%）とやや多い。

㎡当たり莖数（平年、前年）及び株当たり莖数

コシヒカリ	県平均	447本	（平年比 106%	前年比 108%）	24.8	本/株
	加賀	447本	（平年比 107%	前年比 111%）	24.5	本/株
	能登	448本	（平年比 103%	前年比 103%）	25.4	本/株
ゆめみづほ	県平均	541本	（近年比 110%	前年比 107%）	30.3	本/株
	加賀	567本	（近年比 115%	前年比 112%）	31.7	本/株
	能登	490本	（近年比 100%	前年比 98%）	27.7	本/株
ひやくまん穀	県平均	459本	（近年比 112%	前年比 111%）	23.4	本/株
	加賀	469本	（近年比 119%	前年比 118%）	24.5	本/株
	能登	448本	（近年比 105%	前年比 106%）	22.4	本/株

4. 葉色

コシヒカリは前回調査時から低下しており、3.8（葉色板値）と平年に比べ0.2、前年に比べ0.4低い値となっている。

ひやくまん穀は、前回調査時から低下しており、4.2（葉色板値）と近年及び前年に比べ0.1低い値となっている。

【病害虫の発生状況】

1. 葉いもちの発生が散見される。ブラスタムによるいもち病感染好適日が、7月13日から15日にかけて 県下の広範囲に出現している。7月第1半旬から第3半旬にかけての出現数も平年より多くなっている。[病害虫情報-6（令和元年7月16日付）参照]
2. 雑草地の斑点米カメムシ類の発生頭数は平年の1.4倍と多く、特に飛翔性カメムシ類が多い。[病害虫発生予察注意報第1号（令和元年7月11日付）参照]
3. 紋枯病の発生が散見されている。
4. ニカメイチュウの食害が散見されている。

当面の対策

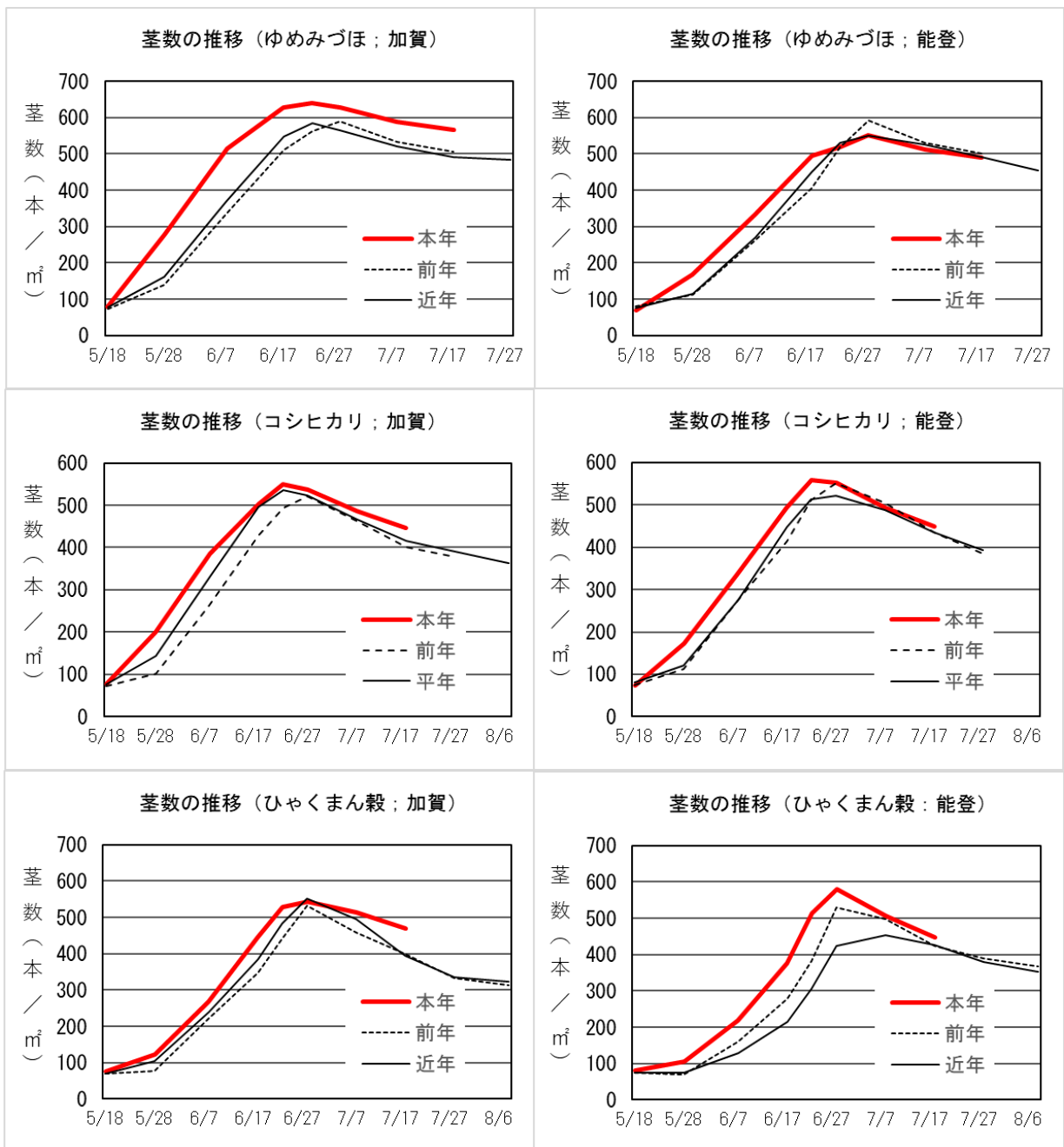
1. 早生は既に出穂期を迎えており、中生、晩生は今後出穂期を迎えることから、**飽水状態を保つ。**
2. 穂肥
 - (1) 分施肥体系のコシヒカリ及びひやくまん穀の2回目の穂肥は、地域の基準量を目安に適切に施用する。適期を逸しないように稲体をよく観察し、遅くとも葉耳間長+2～3cm（出穂7日前）までに終了する。
 - (2) 全量基肥体系のコシヒカリ及びひやくまん穀に上乘せ追肥を行う際は、地域の基準量を目安に出穂10日前（葉耳間長±0cm）～出穂7日前（出穂7日前）までに施用する。
3. **いもち病の蔓延を防止**するため、圃場の巡回を強化し、**葉いもちの発生を確認したら直ちにフェリムゾン・フサライド剤で防除**を行う。
 - (1) 圃場巡回は**常発地、中山間地、川の近く等葉面の湿潤時間が長くなる地点**を重点的に見回る
 - (2) **予防剤を散布していない圃場、予防剤を散布してあってもいもち病に弱い品種には十分留意**し、発生が無いか確認する
 - (3) 農薬の使用回数に注意して防除を行う（フェリムゾンを含む農薬の使用回数は2回以内、フサライドを含む農薬の使用回数は3回まで）
 - (4) **穂いもちの発生を防止**するため、**出穂前後の基幹防除は適期を逃さず**実施する。
4. 斑点米の発生防止
 - (1) 7月中に出穂期を迎えるほ場は、出穂7～10日後と14～17日後の2回の本田防除を徹底する。
 - (2) また、8月以降に出穂期を迎えるほ場では、出穂7～10日後の本田防除を徹底する。
 - (3) なお、防除後もカメムシの本田侵入が確認された場合は、さらに追加防除を実施する。
 - (4) 出穂後の畦畔除草はカメムシ類の本田侵入を助長するので、やむを得ず除草をする場合は本田防除の直前に行なう。

7. 出穂後は登熟向上を図るため、間断通水（3～4日おきに通水）による飽水管理を刈り取り3日前まで行う。特に、登熟初中期（出穂後6～20日頃）に高温と水分不足が重なると、白未熟粒・胴割粒の発生を助長するので通水を徹底する。

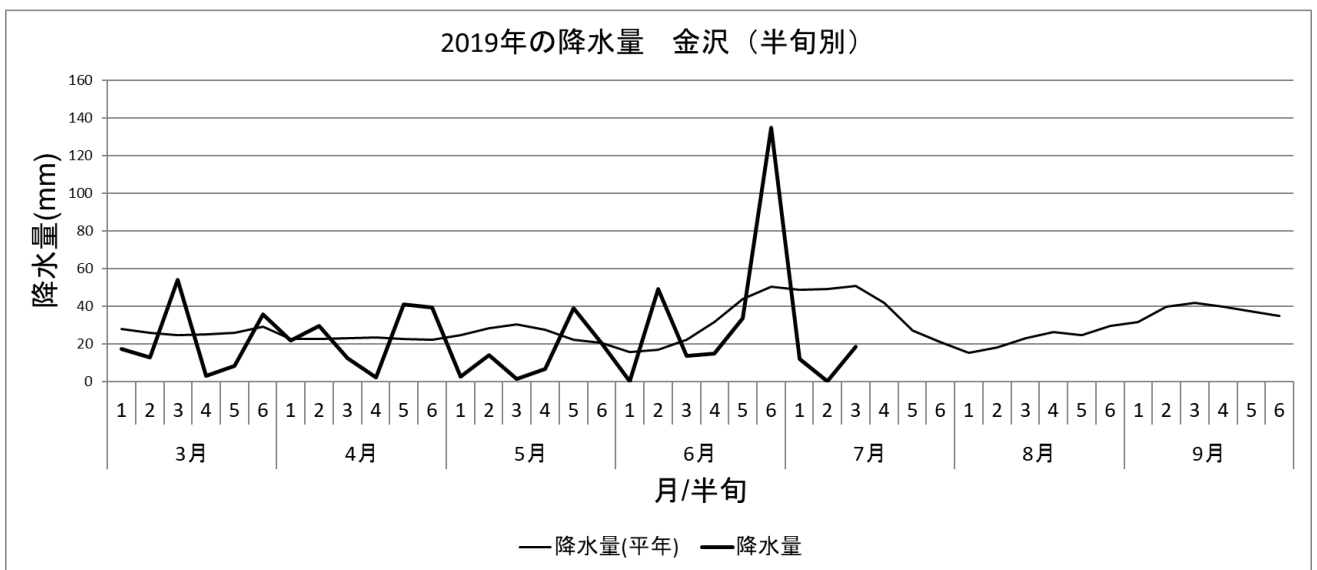
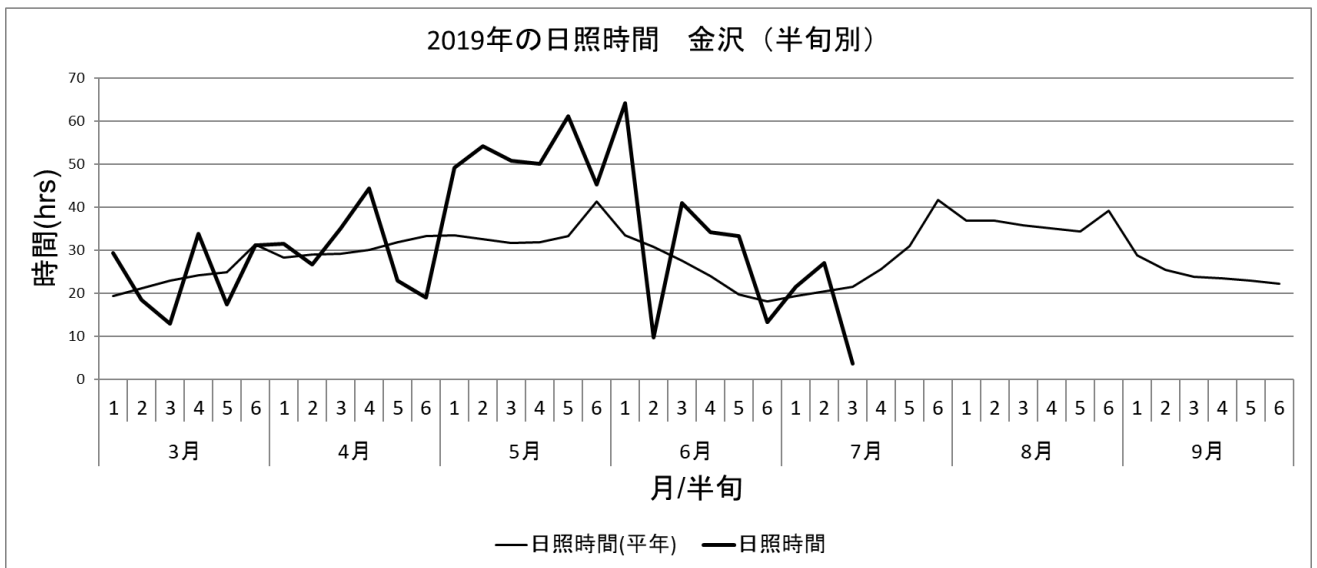
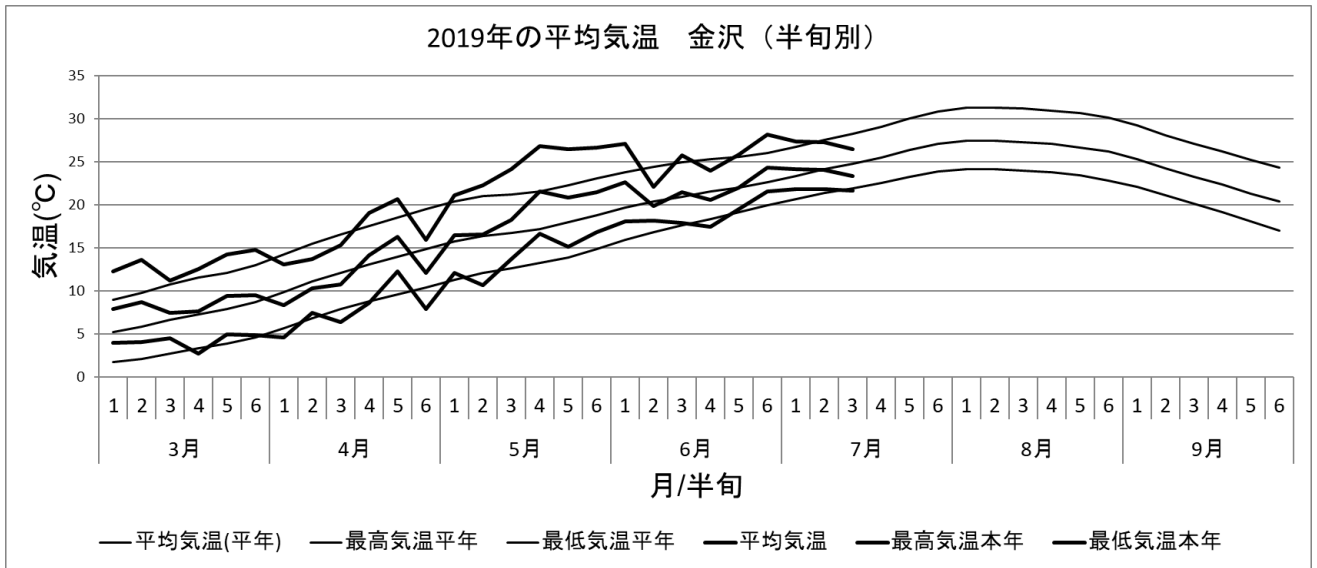
8. 台風の接近に伴い強風やフェーンが予想される場合は、あらかじめ入水し稲体の活力低下を防止する。

<参考：地域別茎数の推移>

・ゆめみづほの現在の茎数は、近年及び前年より多い。コシヒカリは平年並で前年よりやや多い。ひやくまん穀は近年及び前年よりやや多くなっている。ゆめみづほ及びひやくまん穀の穂数は近年及び前年に比べ多く確保、コシヒカリの穂数は平年並で前年に比べやや多く確保される見込である。



気象経過イメージ（金沢気象台）



気象経過イメージ（金沢気象台）

